

メタモルフォーズの往復書簡

SUKIMAKI ANIMATION × 允子(みつこ)

現在制作中の「LUNATIC PLAN(e)T」から派生した SUKIMAKI ANIMATION と允子による共同作品を展示いたします。アニメーション作家鋤柄真希子が絵を描きアーティスト允子が布を縫い重ねる。会話を楽しむように目的地を持たず相手に呼応するそのたびに軌道を変化させながら、生成途中の作品は二人の手を何度も往復しました。往復書簡のように編まれた作品をお楽しみください。

2023年4月27日[木]-5月29日[月]

場所：京町家えほん館むむむ 京都市中京区西ノ京池ノ内町23-5

Open：10:00-18:00 (金曜のみ19:00まで)

Close：火曜・水曜



ワークショップ1：はじめての縫い物

2023年4月30日[日] 11:00-17:00

布を使って作品を発表してきた允子とみんなで一緒に大きな作品を作ろう。初めて縫い物をするお子さんでも允子が用意した道具を使って参加していただけます。(対象年齢:どなたでも)

▷ワークショップ参加費：投げ銭

▷作家の滞在中(11:00-17:00)、好きな時間にご参加ください。

ワークショップ2：はじめてのアニメーション

2023年5月13日[土] 13:00-15:00

アニメーション作家鋤柄真希子と一緒に動画を作ってみよう。描いたあとはスマホで撮影して実際に自分の絵を動かしてみよう。(対象年齢:6才以上)

▷ワークショップ参加費：¥1,000 (小学生以下 ¥500)

▷予約メールアドレス：ehonkan606@gmail.com

▷定員10名(ご予約優先となります)



Sukimaki Newspaper PAROLE Vol.4 | April 6, 2023

<https://sukimaki.com>

@sukikara_makiko

パ
ロ
ル
vol.

4

無料



「宇宙のはじまり」

宇宙が誕生する前の世界はどんな色だったんだろう？

絵の具で色々な色を混ぜると黒っぽい色になる。光は色々な色が混ざると白っぽくなる。細かなゴミが混ざったホコリが灰色に見えるのは、化繊のゴミが混ざっているかららしい。人々が化繊の服を着る前は、ホコリは黒っぽかったんだろうか？化繊＝プラスチックは変化が少ないというイメージがある。分子同士がガッチリ繋がっていて、分解されにくい。“変化が少ない”というのは自然の流れに反している気がする。この宇宙に存在するあらゆるものが日々変化している。大きな川の流れのように同じ場所には二度と戻らず、変化しながら前へ進む。私の細胞は新陳代謝を繰り返し、死に向かって一歩ずつ進んでいく。死が訪れても私だったものは変化し続け、新しい何かへと変わっていく。変化することが生であり死である。

宇宙が誕生する前の世界はすべてのものが止まっている。今この世界にあるもの全てを構成する原子は存在するけれど、止まっている。ただそこにあるだけ。静止した世界では変化が無く、ずっと同じ状態が続く。生と死が無い世界。プラスチックのホコリみたいな灰色をしているかもしれない。そんな世界で野ウサギが走り出す。野ウサギは何かを産み出したいとかそんな気持ちは微塵もない。ただ走り出したくなっただけ。野ウサギの手や足や体は次々と静止していた原子にぶつかっていく。動きを持った原子は互いにぶつかり、ひっつきはじけ、新しい何かに変わっていく。灰色の世界からたかさんの色が生まれる。これが『LUNATIC PLAN(e)T』の冒頭ビッグバンになる。(鋤柄真希子)

Small island(book) Big song

「島」がつく小さな町の本屋さんで、言葉を交わすより先に、わたしたちは互いの作品で互いを知った。

その長谷川書店で、「深海魚ロマン」という布作品の展示会をやっていた時のこと。本屋さんの天井で泳がせていた民族衣装のスカート3枚で作ったリュウグウノツカイを見てくれた真希子さんが声をかけてくれた。あ、あの、ス、スキカラマキコさんが！わたしの、作品を、みてくれてたー\$%&*?!

わたしはもう少しお話してみたくて、普段は絶対しないけれど、共通の友人にお願いして、お話しませんか？とお誘いした。それほどまでに、わたしは彼女がわたしの作品に何か感じてくれたことがうれしかった。本屋さんにはいろんな世代のいろんな人がやってきて、どんなに大きくても、目立つように吊るしているつもりでも、興味ない人には全く見えない作品だったことがわたしを深海にずぶずぶと良くも悪くも沈めていた頃だった。彼女の『深海の虹』というアニメーションを見た時から、この人は世界をどんな風に捉えているのか、その視点を聞いてみたかった。

そして、つい先日、彼女の『野うさぎの軌跡』といううさぎが駆けると原子を動かしビッグバンを引き起こすという絵をみた頃、わたしはちょうどアポリジニの「ソングライン」という概念に触れていた。大地や自然あらゆる物質は生まれるより前に心の中にその振動数の歌があり、歌うことによって形を与えられる。その振動数を「ソングライン」とよんでいる。アポリジニの神々は歌の織物で世界全体を包んで地球を今ある形へと創造したという。言葉が生まれる以前の話である。

心の中にもうすでに歌があるならば、もう絶対に紡ぎ出せるんだな。どうやって？とか考えなくていい、言葉はいらない。ただそれをそのまま、その通りに歌えばいいんだな、という言葉化不可能ではあるが、わたしの心の中が不思議に確信に満ちて振動していたときに、その絵を見たものだから、「こ、これはまさにわたしの感じているソングラインそのものではないか！」と感嘆してしまった。彼女とわたしは少しづつ違う角度で同じところから作品のソースをすくいあげているような気がした。

ひょんなことから『LUNATIC PLAN(e)T』の原画に布で何か縫いつけるといってんでもなくどきどきする企画に参加することになりました。二人の心の中にある歌がまじりあって結びあってうねりながら紡ぎだされた時、本人たちでさえどんなものが出来上がるのかわからない。それがわたしにはたまらなく楽しい。もうすでに始まっている往復書簡のようなやりとり言葉は介在していない。言葉でやりとりすることがとても苦手なわたしにも誰かに届く大きな歌となりますように。(允子)

*(「Small island Big song」という言葉は映画『大海原のソングライン』より拝借しました。)



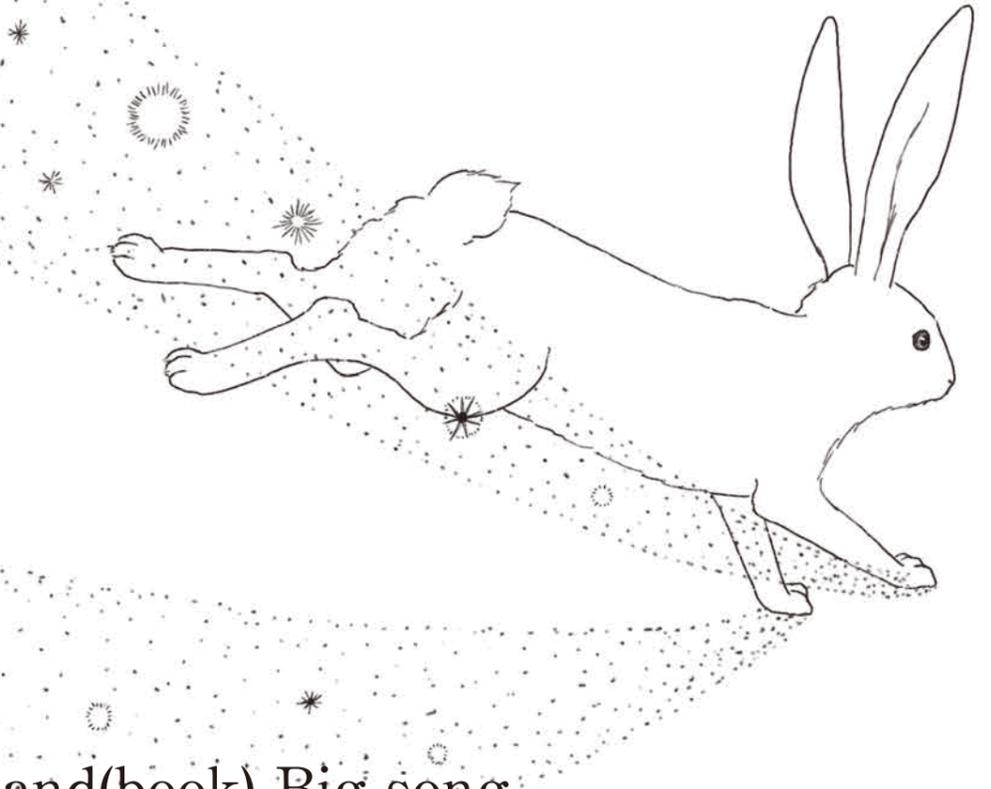
'Correspondence of Metamorphosis' in Progress

境界と融解

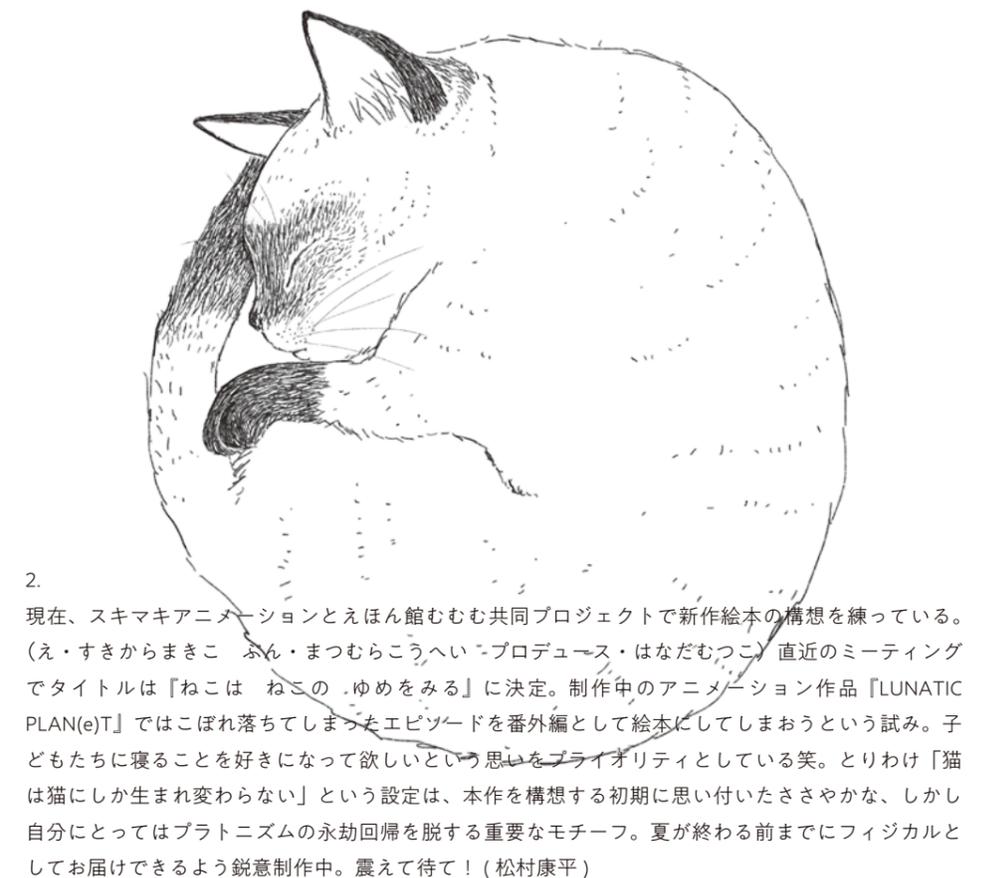
川内倫子 M/E 展と新作絵本『ねこはねこのゆめをみる』

1. 『うたたね』(2001)の衝撃からおよそ20年、川内倫子『M/E』展は2010年代以降に制作された作品で展覧会が構成されている。日常の身近なものを被写体としていた川内の身近さは地球や宇宙にまでその触手を広げながらも、フレームの中に浮かぶイメージは過去作から変わることなく柔らかな空気に満たされ、見つめる対象の等価性をより強固なものにしている。川内に撮影したものを作品として産み落とすかどうかの判断基準があるとすれば、遙遠なものや身近なものが接近しているかどうかにあるのではないだろうか。例えば、1.5億km彼方からやってくる太陽光線を呼吸するようにレンズに取り込み目の被写体と解け合わせる。逆光を撮ることの必然性。その融解は写真作品内にとどまらず、作家自身と撮影対象にも恩寵をもたらす。本来撮影するという行為は、被写体に対してカメラのレンズという絶対的な境界、他者性が備わっている。しかし意志を持った撮影者はその場・その時に完全に溶け込んで同化している存在でもある。写真家はこうした矛盾する営為を永遠に繰り返している。

川内作品といえば、F値開放で捉えられたボケ味が真っ先に思い浮かぶ。展覧会ならではの大きく引き伸ばされた写真群に包まれ対峙すると、視界を覆っているのは焦点の外れた背景(色のついた空気のようなもの)、抽象度の高い方であることに気付く。事実、画面における含有率はボケ味の方が多いはずである。その上に浮遊し始める作家の捉えたピントの合った対象(有機物無機物を問わず)の輪郭。川内の提示する「身近なもの」はボケ味を伴った空気感や透明感を纏わせ、あるいは霧や煙といった視界を遮るものの奥に潜ませ、運動や光といった現象として昇華する。



現在 SUKIMAKI ANIMATION で制作中の新作アニメーション。動物と植物が織りなす宇宙を舞台にした SF ファンタジー。



2. 現在、スキマキアニメーションとえほん館むむむ共同プロジェクトで新作絵本の構想を練っている。(え・すきからまきこ ふん・まつむらこうへい プロデュース・はなだむつこ)直近のミーティングでタイトルは『ねこはねこのゆめをみる』に決定。制作中のアニメーション作品『LUNATIC PLAN(e)T』ではこぼれ落ちてしまったエピソードを番外編として絵本にしてみようという試み。子どもたちに寝ることを好きになって欲しいという思いをプライオリティとしている笑。とりわけ「猫は猫にしか生まれ変わらない」という設定は、本作を構想する初期に思い付いたささやかな、しかし自分にとってはプラトニズムの永劫回帰を脱する重要なモチーフ。夏が終わる前までにフィジカルとしてお届けできるよう鋭意制作中。震えて待て！(松村康平)